

椿説弓張月

編前
三



~13
3908
3



へ13
3908
3

鎮西八郎 爲朝外傳 椿説弓張月前篇卷之三

東都 曲亭主人編次

第六回

爲朝ハ踏ま。彼國の言語をよく紀平治と同諱ら薩摩平沖の小
鳴より便に。噴風小真帆揚るや日あると琉球へ渡海しひり。
さうは主従ハ日本の商旅ふ打す。旅館小歌ひ彼鶴の生
方を正入と志す。あはるの絶く。かくては徒小日敷祓うて
邂逅す。ひもあ。只管愁ひ同し。有朝爲朝
主徒起出く。えまの。巻絹練のさひ悉夫。ひつ。彼
小盗賊のふあ。ふらり入りんと疑ひ。ひつ。彼

春説弓張月前篇卷之三

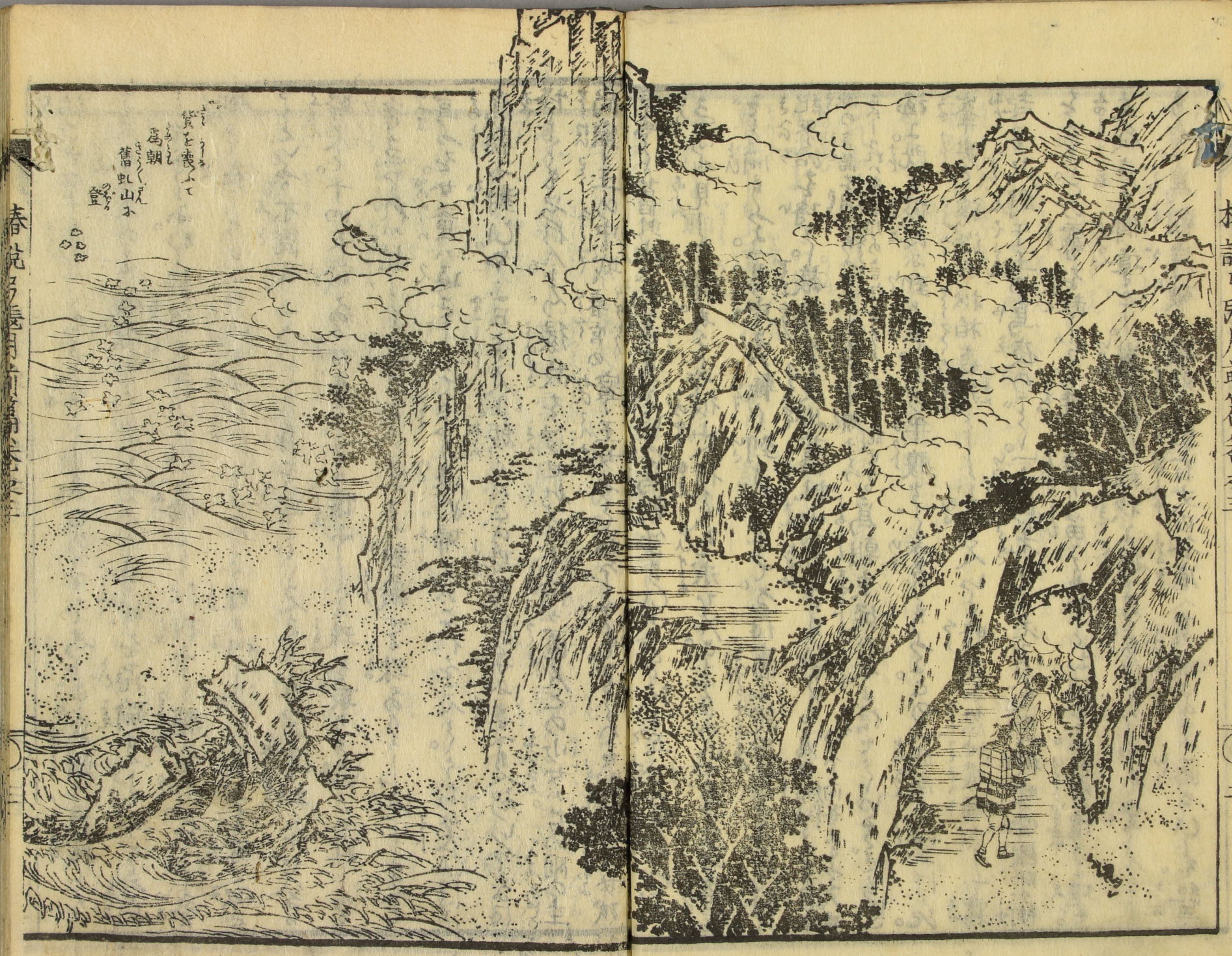
此をよそ入りあつたふりより入らうとおぼしき知るも。あまより不審
 りつ。店官人を呼ぶ。あがりのすゝを告めへ店官がいふ中。くまより西南
 よありて舊虬山といふ穹谷あり。是則花瓶嶼と雞籠嶼との中央に
 一山中に矇雲國師といふ一人の道士在るあり。この神仙よく人の爲ふ
 禍福吉凶を説きふ。御音の物は應むるごとく。こをりて國王これを尊敬
 せり。斜めも彼矇雲國師。欲とおほきものありと此の忽地術をりて
 これを取りまふりあり。そのとれらるゝの齋戒沐浴。山に登り叩首て
 乞求れ。この偶々下りてせまもあつたり。又逐るものもといふも國王の
 尊信し。道士は在る。こをを説きふ。つら。夥の損を。己のこ
 る。れ。聊も恨む。ころあれ。その人。あ。崇あり。かりふ。物
 を失ひ。この矇雲國師。戯ふ。復人とも。

昔虬山へ赴き。多くといふ。爲朝は。五分の憤あれ。も
 見る。見。彼山へ行く。乞求。路程
 同。一日中。輒。到。審。説。爲朝
 紀平治を。旅館を。出。舊虬山へ赴き。爲朝。琉球。あり。彼國
 球の言語を用ひ。語。爲朝。主。從。足。信。こ。

起。只野干玉の鳥夜め。一歩の先。彼矇雲國師が術
 をり。この霧を起。徒を遮り。留。只管憤。堪。

主從声を御導。巖。探。爲朝岸破。踏。數百丈の谷底へ真逆。落。紀平

春記 爲朝 紀平



寶を喪ふて
爲朝
舊山小
登

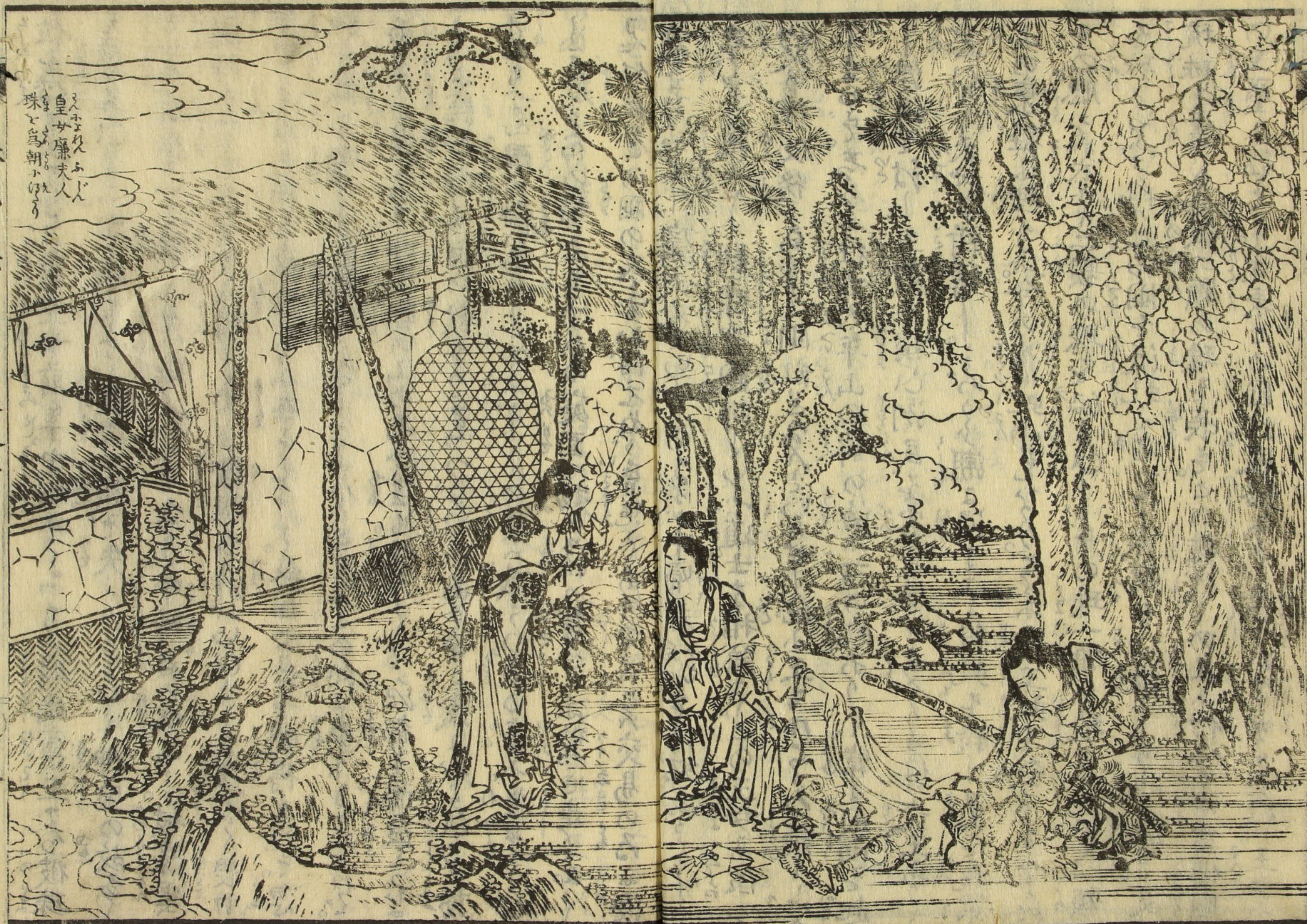
春記
三月廿一日

林前
五月廿一日
篇卷之三

二

治へまこと一前ふらちりあまここのりをもとて爲朝ハ器械
 へ早業の煨煉みく。よく七人の屏風を飛踰もく。今ころ此
 倒る在し。ふ勿心地女子の声し。このころ珠は似る。このころ珠は似る
 不圖耳ふ入りし身を起し。又入りし身は年紀二十七八ある
 婦人と。十四五歳ある女童と。このころ懐中珠を取り。いとうれし
 言ふを女童ハ返こして走り退ぬ婦人のこれを見。うち笑ひは
 爲朝ふ對ひ。や日本人は短く。この珠をこの子ふよへ人かひは
 怪しむもせけん。縁故をせせは。何う遷人との少女との國の主
 尚寧王の中城。春宮の寧王女もくおがやまて。このころ王女は
 産す。夫人といふりのある。中婦君。その妬みく。この
 讒言。刺矇雲國師といふ道士を相語る。この王女も位を
 久後うま。國乱とあんといせ。秘小王も。疑る
 一のり。ある。往古太平山の前の海ふ。の虬あり。常風雨を起
 一洪波を。五穀を損。洲民を害。多きり。先王あ
 愁ひ。天地小祈禱。潮は浸。彼虬を殺。是を龍架
 山の東。壑も埋。今の舊虬山。先王虬を殺。一
 その腮を。二顆の珠を。その珠一顆を。又一顆
 を。この國を。虬を。又
 琉球と書。彼二顆の珠を。この珠代。の王。中葦傳國
 の王。元來。この國。風俗。王子。王女

治へまこと一前ふらちりあまここのりをもとて爲朝ハ器械
 へ早業の煨煉みく。よく七人の屏風を飛踰もく。今ころ此
 倒る在し。ふ勿心地女子の声し。このころ珠は似る。このころ珠は似る
 不圖耳ふ入りし身を起し。又入りし身は年紀二十七八ある
 婦人と。十四五歳ある女童と。このころ懐中珠を取り。いとうれし
 言ふを女童ハ返こして走り退ぬ婦人のこれを見。うち笑ひは
 爲朝ふ對ひ。や日本人は短く。この珠をこの子ふよへ人かひは
 怪しむもせけん。縁故をせせは。何う遷人との少女との國の主
 尚寧王の中城。春宮の寧王女もくおがやまて。このころ王女は
 産す。夫人といふりのある。中婦君。その妬みく。この
 讒言。刺矇雲國師といふ道士を相語る。この王女も位を
 久後うま。國乱とあんといせ。秘小王も。疑る
 一のり。ある。往古太平山の前の海ふ。の虬あり。常風雨を起
 一洪波を。五穀を損。洲民を害。多きり。先王あ
 愁ひ。天地小祈禱。潮は浸。彼虬を殺。是を龍架
 山の東。壑も埋。今の舊虬山。先王虬を殺。一
 その腮を。二顆の珠を。その珠一顆を。又一顆
 を。この國を。虬を。又
 琉球と書。彼二顆の珠を。この珠代。の王。中葦傳國
 の王。元來。この國。風俗。王子。王女



皇女廉夫人
珠と為朝小侍

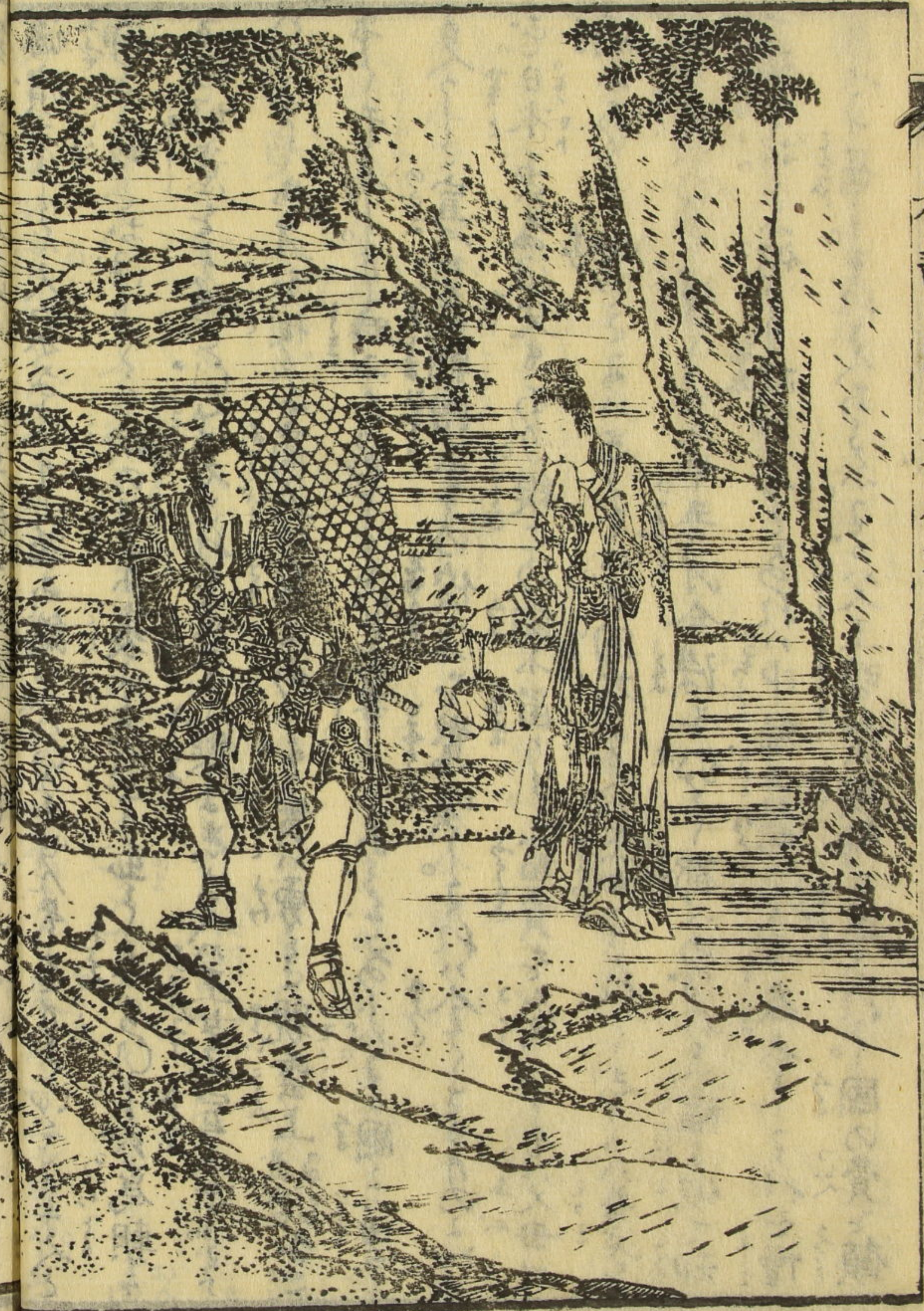
春苑弓馬月前篇卷之三

梅詠可辨月前篇卷之三

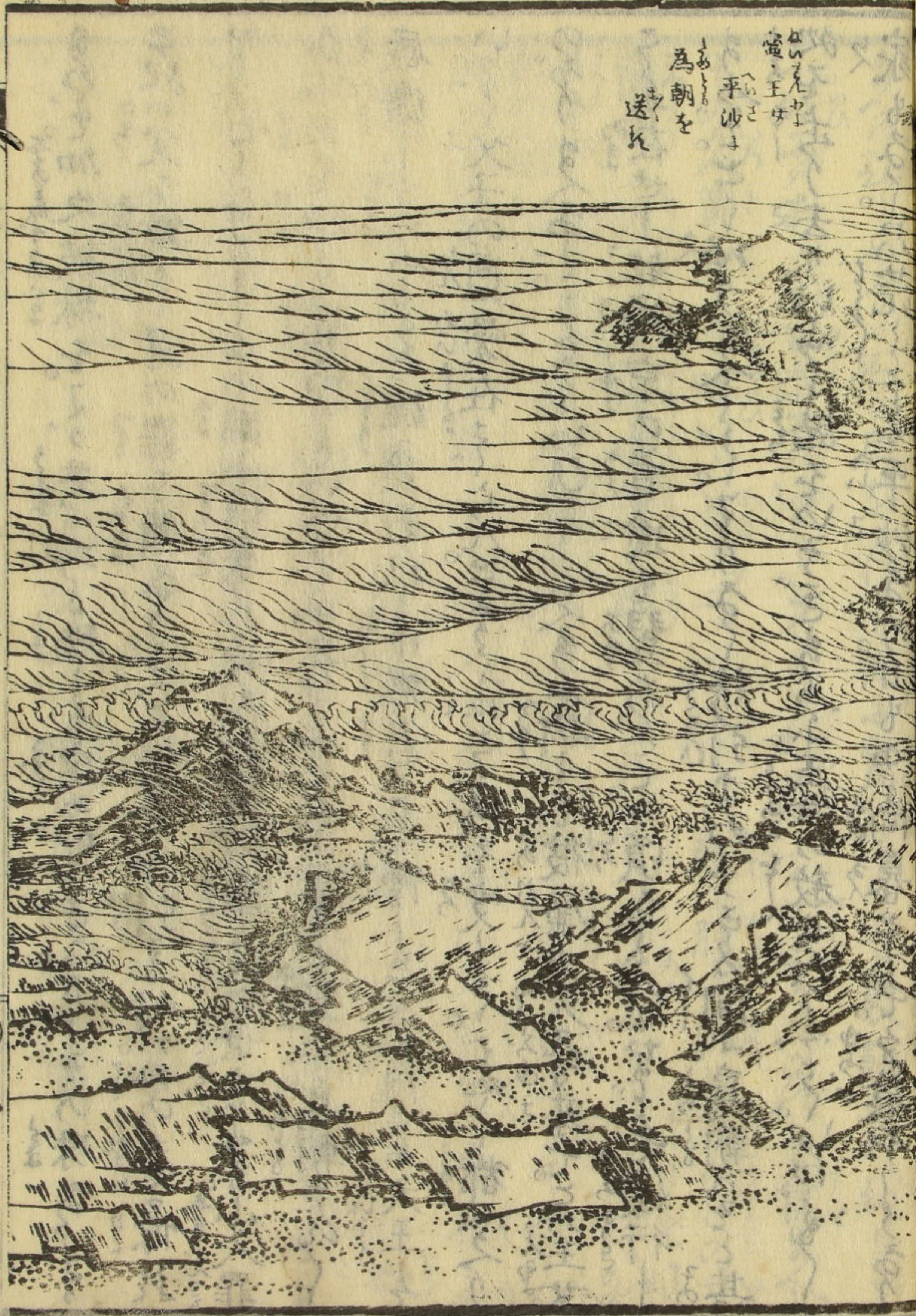
位を借るる事。寧王女前年。中城ふらら。時尚寧王。彼珠
 を領るひふ。いくほもなく。彼珠一顆を失り。かる神室の故を
 うい。其の人もいと怪し。疑ふべし。あま。中婦君の妬み。彼珠雲
 國師ふ。證据あるべし。ひとく。返さく。畏け
 地中城を廢し。疲人とみ。つら。この如く。棄て。心
 あり。昔より。朝の山の雲も住く。泥都を隔は。つら
 しく。空の蟬の。秋を。あふ。あふ。三歳。およ。ひる。坊
 の。風の。や木。の果。磯。浪の音。度。び
 宿の掃も。庭面へ物の落。響せ。驚。走り。あ
 見。この國の人。おほ。昏絶。あり。この交易の。み。渡
 海せ。日本人。貯。薬。あり。や。と。立。り。て
 懐を。探。ふ。この珠あり。今。熟視。小。往。王女。れ
 一顆の珠。露。よ。その珠。あ。か。つ。れ
 都。より。王女を。宮中へ。還。入。せ。又。年。及
 の。寛屈を。脱。す。あ。の。一顆の珠。あり。これ。千。乘。の。位。は
 押。審。ま。え。つ。せ。て。よ。か。こ。口
 説。も。亦。更。は。返。さ。ま。る。為。朝。数。回。歎。息。す。二。人。の
 二人の女子を。え。る。形容。を。い。て。窈。窕。れ。物。い。ひ。も。風。流。を。被
 少女の氣高。平人。あ。お。ほ。せ。今。この珠。を。望。王。を。稱。得
 せん。や。沈。吟。あ。又。ひ。く。宣。ふ。彼。珠。も。
 本。國。あ。り。の。求。る。王。室。中。人。は。精。も。

其れ日本商人この國に安んずるのありて、夥の貨を積り渡海せ
 小前夜蒙雲とつゝ惡道士ふ奪ひ去ると、とをとり復てん、彼
 首の山へ登り、如此くのゆゑ、この如く轉隨が、介抱を、い
 へ、その珠も又惜むは足らねど、其貨の多きを、其珠只一顆を
 これ又、四方に進んで、せむ、何を、い、き、く、索、る、の、と、掛、る、と、さ、く、返
 入へ、宣へ、廉夫人、寧王、女、都、不、在、さ、の、ふ、す、れ、の、方、
 求、る、の、を、と、せ、ま、り、ん、と、易、れ、れ、今、一、塊、の、土、あり、も、か、の、す、ま、投
 ち、ら、ぐ、一、椀、の、飯、あり、も、私、の、旅、一、日、に、ま、り、と、さ、り、し、珠、ふ、か、
 人、も、國王、に、奏、し、分、え、ら、え、ら、を、稱、へ、さ、り、試、み、索、る、の、を、と、り、そ、し、
 しく、鳥、朝、政、ひ、く、ま、索、る、の、の、この、國、れ、産、物、の、あり、も、これ、日本
 も、あり、り、日、一、隻、の、鶴、を、放、せ、ら、足、も、と、黄金、の、牌、を、著、り、これ、を、放、
 つか、天皇、彼、鶴、を、召、進、す、ま、べ、と、勅、あり、その、さ、す、り、頃、放、遣、す、と、悲、み、
 も、こ、の、儀、あり、り、許、り、り、と、これを、陰、陽、師、に、問、ひ、鶴、は、今、琉、球、國、に、あり、と
 い、ふ、より、數、百、里、波、濤、を、凌、ぎ、や、やく、渡、り、来、つ、れ、も、い、ま、は、鶴、を、放、
 出、す、却、り、貨、を、失、へ、薄、命、を、失、す、の、人、は、多、ひ、と、い、ふ、一、と、宣、ふ、
 廉、夫、人、も、寧、王、女、も、これ、を、せ、り、さ、く、よ、海、を、い、ひ、奇、し、き、の、ゆ、
 今、朝、も、庭、へ、一、隻、の、鶴、の、あり、り、と、よく、人、不、馴、れ、追、つ、も
 飛、去、ら、な、い、これ、を、つ、る、ふ、黄金、の、牌、を、著、り、り、容、金、と、他、國、より、來、る、
 の、と、お、ぼ、す、か、ん、茹、ふ、養、く、今、見、は、彼、首、の、あり、の、方、を、尋、り、鶴、の、これ、を、
 あ、ん、と、い、ひ、つ、忙、し、裡、面、に、走、り、入、り、王、女、も、も、ま、も、撓、げ、は、打、て、出
 ら、る、を、い、ひ、さ、す、い、へ、も、あ、れ、ね、彼、鶴、も、あ、ら、ぬ、爲、朝、ふ、く、と、海、を、
 お、ぼ、す、と、れ、あり、り、これ、を、あ、り、と、尋、り、れ、も、終、ふ、索、り、も、今、は、あり、り、

鶴をうつるとそれれ今彼珠をりて鶴は抱へよも固辞もは珠は既に
 此方にもありさうは鶴をあらんとしひもあてつて立よりて茹るあふ
 それを脊負立えんそりあを廉夫人引さちて今日王女おりのこも
 珠をひく都へ入りのりまてこそは此方賜あるとこのすぬ人も
 本意ありまは且く逗留し王女の護跡あをすちその酬謝はし
 受んやといひ為朝頭を左右しちりしれ今鶴をひく歸を土への如
 明日國を異よまといへども今日驩を存くさるのみ自他の大幸なり報
 恩を受くふ及ぶといひさり東を望み立出まふかき為朝の路
 十町ありもまゝいんとおせし後方より只管ひきのありちり
 誰そといえりまは彼王女ありその時寧王女の中ちり走りり
 此の國の業内をいよもあふとえあるふ是より東南二十里のま
 海濱に人家あり路に饑ひいふせん是をりしとていふ人
 仰ぐ飯をおほし桐の葉も裏より取ち多ひいふ為朝を
 その好意とよほといひえこれを受く懐は志まへの王女又立まゆ
 いつし此方を相ふ商人の容よあも實の勇と親雲上武士の
 ありあへり時不あつてが寡ありあふこの國に田
 多うと宣へは為朝潜ふその俊を驚嘆これは今くるりの
 日本ありは父もあり縦この國小田り富貴を受くとも父母此
 國ふあり貧乏さあは志くまてと回答の人の王女さねて志くは吾を
 も日本へ移りゆりまらんや吾才今珠をひく都へのは福に似て却
 て禍を招く不似り故いふとあれの中婦君妬ふりく在あこれ憎
 むよ甚しそんえあふこり父王矇雲國師は迷され國の費を顧



平沙
為朝を
送れ



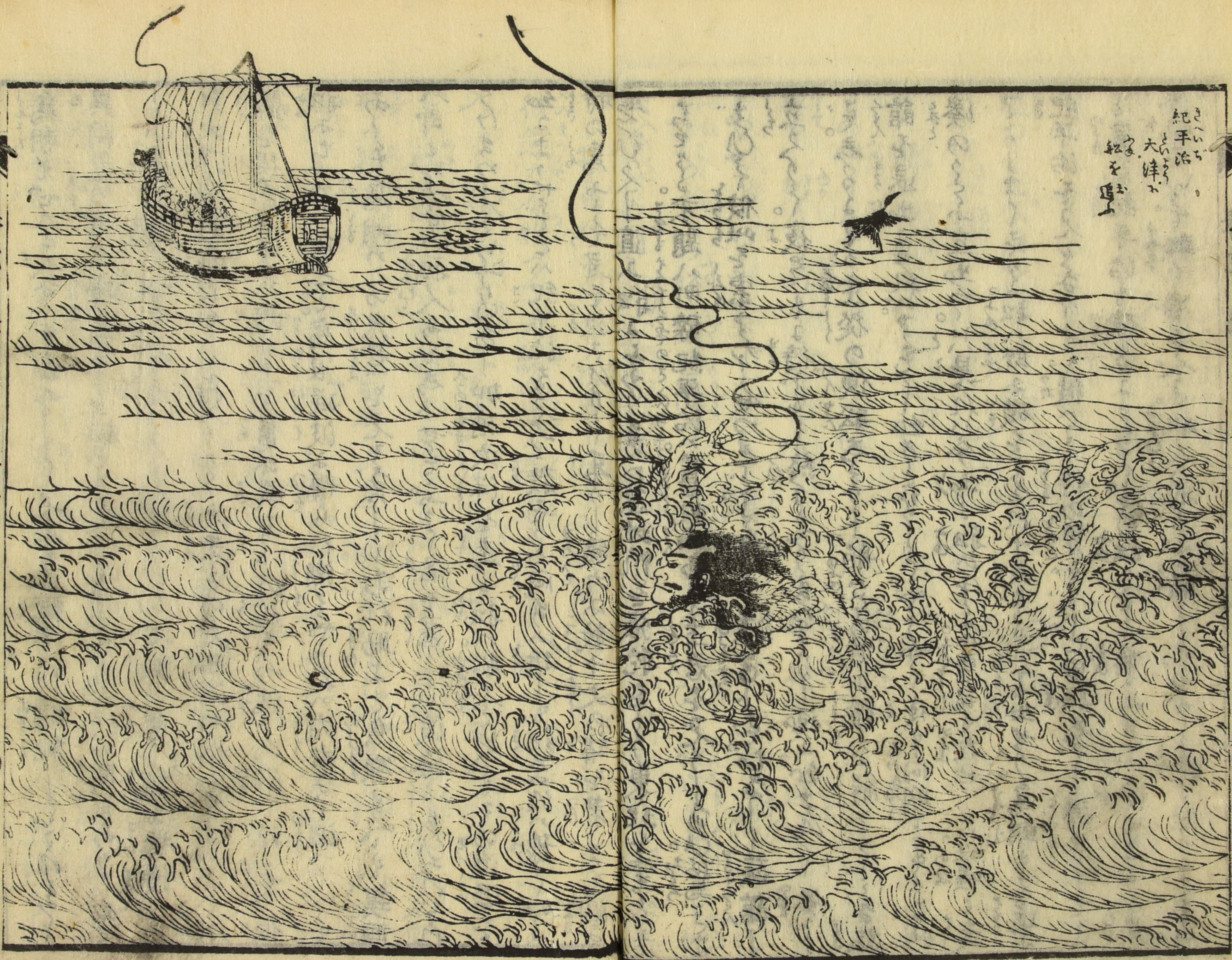
のりぞ加之彼珠を。さう失ひつゝ珠も定めかたさる。その珠ありさう
 と記ハ父を欺く。刃の罪を贖あり。又これをさけ引ける時ハ母の志は愕然
 たり。さうをりくこの國ハ住果んるをねらば華人の世言も小人罪
 り。玉を抱く罪ありといふ。是ころう人よとて宣ハ鳥朝ヤんく
 感激。さうみとら理ありあれと中婦君こそ憎くともおほさあ大王と
 いう。父子の恩愛在ららん。さうくはを變へく。さうく都へ入り
 のりさ入あど。さうくいひく。さう折しも彼廉夫人尋來て。さう王女
 さう在せ。能歸京の首途も翌あさての頃あんは。さう漫行
 さうさ。さうゆりさ入。さうく誘引さあさ。さう間ハ鳥朝ハそと其
 処を走り去り。さう踏をいさ。さうあ王女の教もい。さういけも
 家もさく。只荒くさる平沙あり。日も中向暮とて夕餐ハさうあり
 さ入の砂さめる。石は尻をさけ。向ハ貫け。裏飯を打。さう
 不飯あり。日本さい。さうもさぬ。蒸さる芋なり。これを食。さう
 その父黄あ。味いと甘。さうさ。さう既ハ腹ハ満ぬ。後世この芋
 薩州ハ渡り。世ハ琉球芋と稱さる。これさる。按さる。琉球芋。薩東
 薩摩芋と稱さ。當初。東埔塞瓜。小あを唐。の二種。近來本邦。種。下
 薩州ハ種。を。婦人。を。又。荒。年。ハ。糧。當
 賤。の。第一。の。菜。蔬。と。て。又。荒。年。ハ。糧。當
 さい。これを食。さ。毒。さい。但。琉球芋。ハ。墨。を。忌。東埔塞瓜。ハ。胡椒。を
 忌。さい。世人。琉球芋。ハ。墨。を。忌。さい。東埔塞瓜。ハ。胡椒。を。忌。さい。
 さい。さい。今。さ。さ。の。ハ。亦。是。他。者。の。老。婆。心。の。こ。

第七回

紀平治船を逐く。鐵丸を飛。野加世馬を駭く。桿棒を嚼む。

鎮西八郎島朝の寧王女母子をとりまき入せて東を浦つゝひり
 只管走りまひつ。その日も既暮れど。おのころの通夜路を
 せせ。今二三十里もまつくとおぼしきと海鷄明曉を生け御しや
 近つとぬ。おほゆはやくは不意もその船をまかり。湊は出まひつ。
 この付天の明とあれ一艘の拍追風よまきとて纜を解ありり。これ
 あん嚮は便船まつ。日本船なり。いふゆふうくまらこひおぼしや
 その船よりまらうくとおもひ。いづらあもくも紀平治のいづまらう人扱を
 棄て。いんも義我よとがり。さきとてこの船は後とる。速あは帰らじ。
 とやせずかやせずと。あざり躊躇く在せう。いまも熱。紀平治
 をすまらう。この船は後と限りある。日数をこさへ父の存じも量ごと。紀
 平治はこの國は別る。おの縦無おくも。あざりまらう。あはれと

そのしす。直み船より入り。入の忽地帆を張舵をとり。東北を望み走
 らる。不題八町磔紀平治の舊虬山より主君をえう。あひ驚。こま
 とひく。彼此を索まかせつと。えと逢ち。むす。旅館
 立ち。夜も待。終。入り。ゆ。おやん。安
 だ。あ。主従の便船まつ。船のこの曉。纜を解。こま。旅
 館を退出。いれ。む。や。中。夜も向明と。か。こ。湊
 の。立。見。今。船の中。曹司。在。吐。走
 紀平治をえ。彼。伴の男。この船。禮。て。よ
 と宣へ。紀平治も磯方。よ。の船。も。興。風。の。走
 り。帆。を。輒。帰。入。人。へ。顔。遠。な。り。



紀平治
大津
船を
墮

春説子巻月前篇卷之三

春説子巻月前篇卷之三

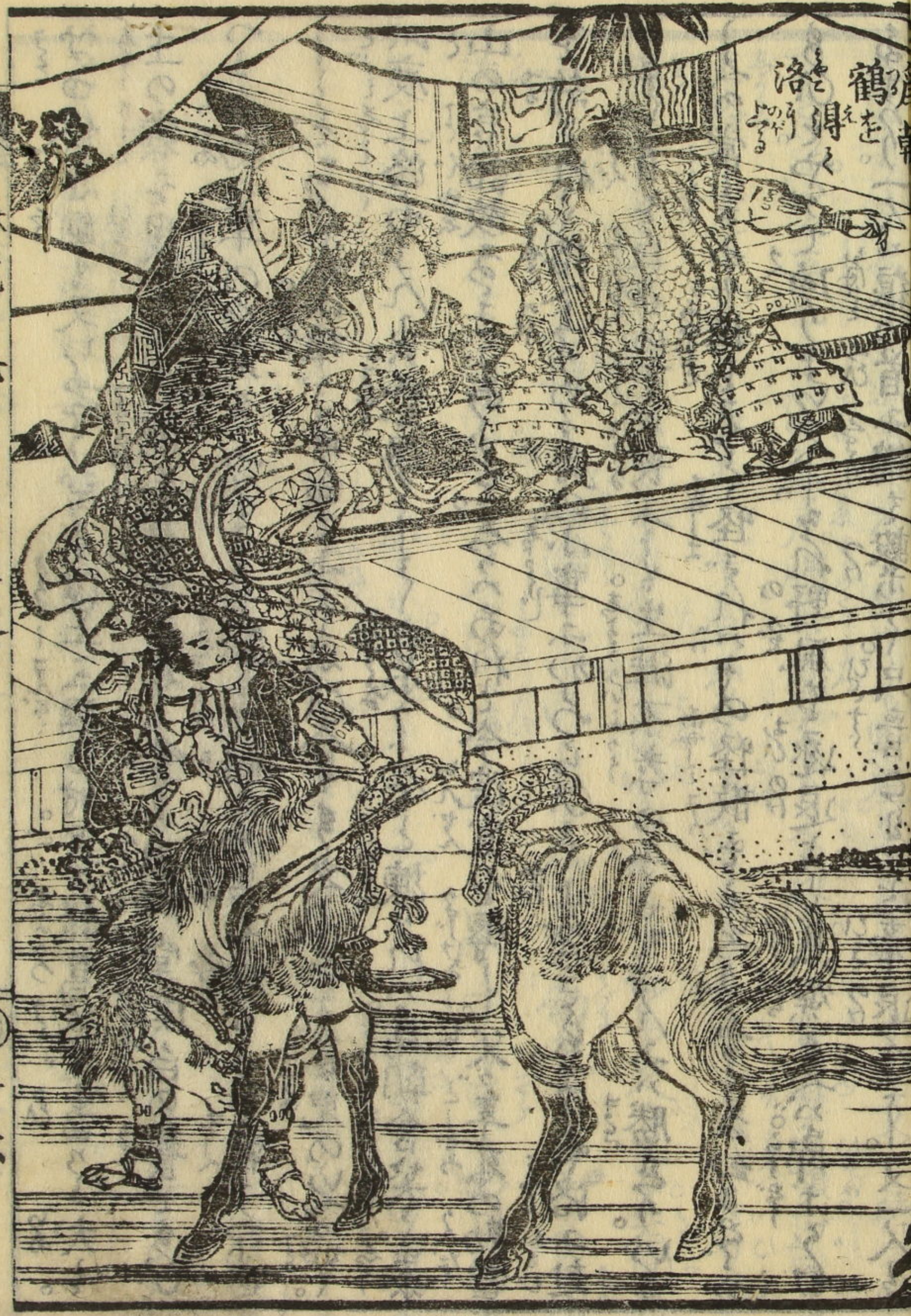
十一

爲朝もいざさくさく。さくさく。又えも紀平治の蹉跎。異國の御導も擇まざる。むろろへ。何の面目あり。ぬ。び日本へ赴。べ。追つんと。せり。衣服を脱。頭。捧漫。大。洋へ。を。跳。り。飛。入。り。元。来。の。西。海。人。と。あ。り。水。戲。を。得。り。瀬。は。高。浪。逆。波。は。隔。ら。れ。潮。や。た。れ。た。右。ま。り。酒。つ。へ。も。あ。も。鳥。朝。の。光。景。を。え。ま。り。あ。れ。助。よ。と。焦。燥。ま。り。鎮。西。八。郎。と。い。ふ。船。人。も。あ。り。名。を。匿。し。渡。海。し。つ。た。れ。加。旃。大。洋。を。走。り。船。人。と。い。ふ。も。其。の。進。退。を。知。ま。り。せ。ど。紀。平。治。を。殺。せ。り。同。多。折。し。も。紀。平。治。の。豫。か。り。時。の。爲。し。て。牙。を。放。き。り。耳。に。鐵。丸。十。数。十。丈。の。緒。を。著。り。を。咽。み。擲。鼻。禪。の。間。に。抜。出。し。左。手。に。浪。を。切。り。右。手。を。高。く。一。擲。彼。鐵。丸。を。投。つ。り。緒。の。端。の。手。首。も。さ。り。鐵。丸。の。過。ぎ。船。中。へ。破。れ。入。り。爲。朝。と。受。け。あ。り。線。上。せ。り。紀。平。治。の。分。せ。り。や。り。船。に。跳。り。あ。れ。爲。朝。も。あ。り。安。堵。し。且。感。し。且。悦。し。今。て。八。町。礮。の。緋。号。屢。々。を。あ。り。つ。と。噴。賞。あ。り。彼。鶴。を。ほ。り。又。成。頃。小。船。の。出。り。を。り。已。了。を。得。ぞ。か。ん。せ。あ。く。密。に。や。り。紀。平。治。も。船。を。り。り。後。の。い。も。を。お。り。り。船。中。の。人。も。あ。り。紀。平。治。の。形。勢。小。合。を。掉。し。北。國。の。人。も。馬。小。乘。西。海。の。人。も。水。戲。も。妙。なる。人。の。い。も。及。ま。り。官。待。ぬ。あ。り。琉。球。國。禍。し。諸。國。の。交。易。を。止。め。り。この。ち。日。本。人。も。渡。海。し。

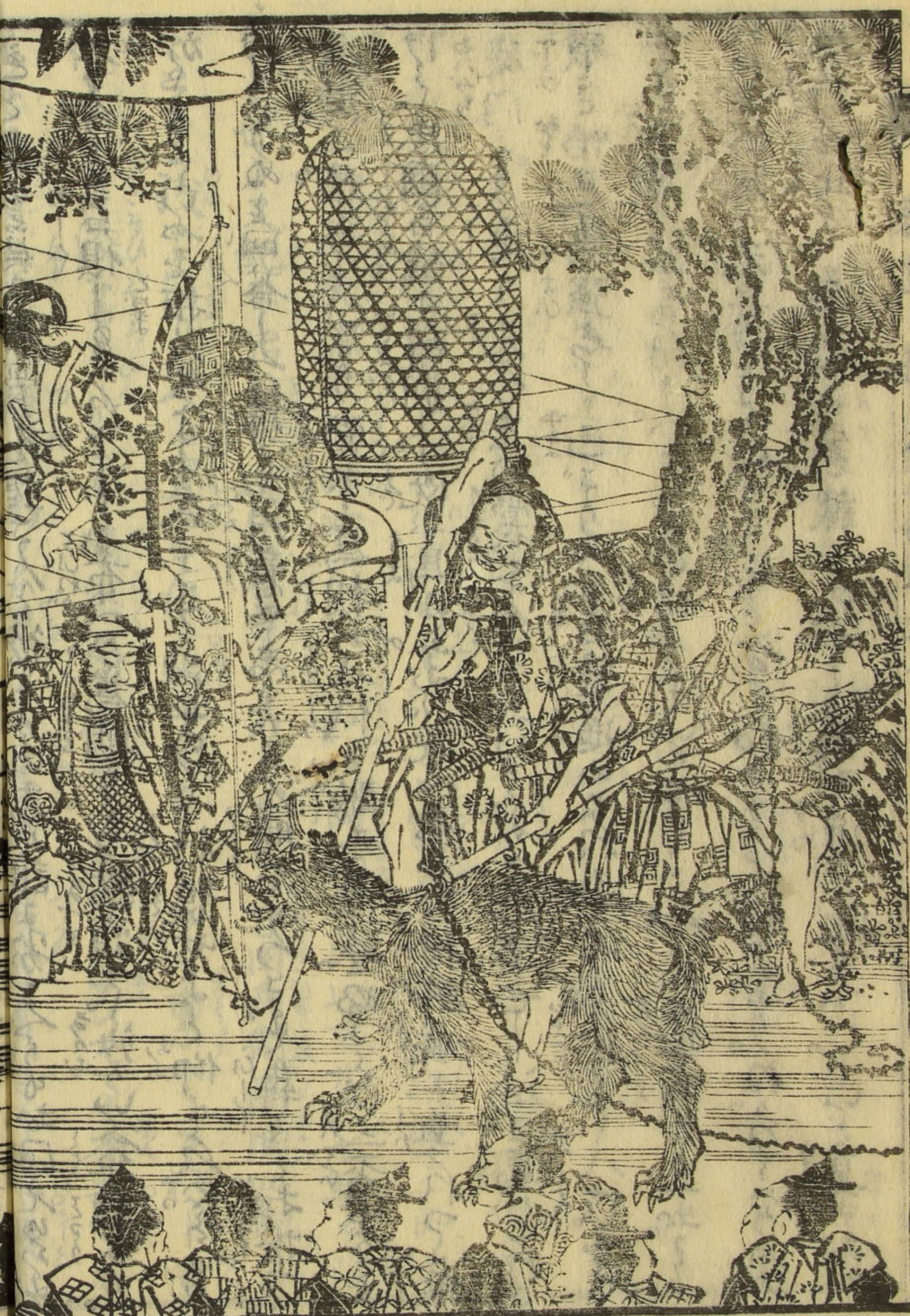
のみふりしとや。彼國の典敗へ。間結休題宰府あり。為朝南渡のち。え
 音耗あり。れは忠國白縫。いさ。其の家隸も。いさ。不安。或も
 海神に祈請し。或は土地に幣帛獻て。只願速ふ。入り。早馬を。り。帰國の。有。を
 の。対。他。変。り。洛。少。も。為。義。朝。臣。も。早。馬。を。り。帰。國。の。有。を
 問。も。使。者。の。往。来。櫛。の。齒。を。挽。ぐ。く。く。早。馬。を。り。帰。國。の。有。を
 是。ハ。出。多。ひ。り。既。上。箇。月。及。び。百。日。の。限。も。十。日。ひ。五。日。ふ。こ。こ
 徒。日。数。ち。ゆ。の。勞。切。る。と。あ。り。は。を。り。一。日。と。大
 洋。数。百。里。を。隔。る。他。の。國。の。音。耗。を。頓。致。す。と。あ。り。は。を。り。一。日。と。大
 濱。壇。の。望。子。連。忙。く。走。り。牙。も。く。曹。司。の。内。証。悉。く。着。岸。志。人
 報。知。さ。り。少。く。衆。皆。凋。ゆ。草。木。の。甘。雨。あ。り。は。を。り。一。日。と。大
 勇。士。卒。ハ。迎。む。か。せ。ん。馬。を。牽。橋。を。扛。む。浦。方。は。走。り
 白。縫。ハ。衣。服。を。更。席。を。う。さ。さ。り。は。せ。く。村。方。は。且。く。一。日。と。大
 町。碓。紀。平。治。以。下。夥。の。士。卒。を。將。く。彼。鶴。を。扛。擔。せ。馬。の。足。搔。を。く。や。め
 ぐ。り。り。ハ。阿。曾。忠。國。も。衡。門。の。外。く。出。ひ。入。恙。を。紀。歸。國。を。祝。し
 て。泣。き。も。正。廳。至。ま。白。縫。忙。く。立。出。り。よ。海。を。速。く。回。み
 紀。平。治。妻。の。八。代。花。麗。打。扮。す。銚。子。土。器。を。り。出。り。人。々。こ。の
 日。の。歡。會。を。の。り。も。至。り。て。い。さ。人。言。語。は。あ。り。書。つ。た。ん。あ。と
 る。因。り。風。濤。の。難。も。く。異。邦。小。往。来。く。容。易。鶴。を。得。る。も。は
 へ。性。雷。死。せ。乳。母。子。須。藤。季。重。賜。を。り。其。の。故。ハ。如。此。く。と。と
 球。を。り。鶴。不。換。り。蒙。雲。國。師。幻。術。寧。王。女。廉。夫。人。の。薄。命
 紀。平。治。水。戲。至。る。さ。く。お。ち。も。ま。お。ち。り。え。の。衆。皆。駭。然。と。く

耳を倒し。感激斜る。其の中。八代。夫。こよ。こ。擧動
 を受く。いと。娯氣。よ。え。え。り。る。爲朝。又。宣。る。院。より。定。り。下。こ
 半。日。数。も。今。い。く。ぐ。も。あ。ぬ。ふ。父。も。さ。さ。お。心。方。く。お。ほ
 ま。め。れ。る。直。上。洛。の。首。途。く。片。時。も。も。鶴。を。進。み。人。り
 かり。も。あ。れ。い。も。駭。の。士。卒。を。領。く。の。あ。ぶ。話。も。果。敢。ら。ず。却。穩。便。を
 ぞ。ぐ。因。り。従。ひ。ぬ。く。透。間。主。計。悪。七。別。當。手。取。手。次。與。二。郎。大
 矢。新。三。郎。越。矢。源。太。松。浦。次。郎。打。手。紀。八。高。間。三。郎。以下。九。六。七。騎。を。限
 了。せ。よ。又。紀。平。治。の。長。途。の。疲。勞。も。あ。る。直。上。吉。田。兵。衛。高。間。四。郎。等
 と。も。も。残。り。留。り。ぬ。と。宣。は。れ。紀。平。治。も。と。も。稟。中。り。それ。が。豊
 後。より。存。添。な。り。と。ぞ。歸。洛。志。も。あ。る。所。り。申。り。ん。本。意。よ。お
 ら。ま。り。長。途。の。疲。勞。あ。る。君。も。又。長。途。の。疲。勞。あ。る。ん。や。長。途
 して。君。の。爲。は。粉。骨。を。竭。え。んと。欲。さ。る。の。志。誰。も。か。え。り。お。ほ。え。り。ぞ
 只。ま。ぐ。り。召。俱。し。ぬ。れ。く。と。希。は。爲。朝。も。ち。點。頭。く。汝。が。い。れ。理。あり。
 が。さ。い。を。拒。ん。ぶ。よ。ま。い。さ。い。は。お。の。く。行。装。せ。よ。と。仰。せ。れ。い。ら。う
 け。り。ぬ。と。回。答。し。つ。豫。く。用意。や。あ。り。り。ん。時。を。う。つ。と。特。と。打。扮。つ。
 廣。庭。小。居。あ。い。ひ。り。當。下。爲。朝。の。八。代。の。酌。を。と。せ。ぬ。く。三。盃。を。さ。さ
 け。く。忠。國。白。縫。小。辞。別。一。既。小。馬。小。ま。ふ。ん。と。志。多。く。彼。野。風。と。喚。れ。つ。狼
 庭。門。より。走。り。あ。り。主。の。裳。を。含。み。引。と。ま。あ。り。せ。し。福。馬。は。これ。よ
 駭。き。怕。と。属。強。あ。く。己。ざ。り。る。白。縫。遙。お。れ。を。ん。く。忙。し。く。八。代。ふ。さ
 や。さ。曹。司。ふ。る。月。中。へ。さ。さ。の。け。り。と。い。せ。く。さ。づ。く。椽。煩。よ。立。出。る
 八。只。今。野。風。の。光。景。を。ん。何。と。も。く。印。さ。う。く。竹。る。あり。ね。お。く。い。ら。の。の
 啓。行。を。止。く。あ。る。と。家。隸。を。の。り。鶴。を。進。め。ま。ふ。し。いと。真。ら。て

春院弓長月前集卷之三



洛鶴
得志



春院弓長月前集卷之三

びぬれぬ思國も又しあやう。むら漢土三國の対吳の諸葛恪う玄田るる大を
 主の裳を曳くその禍あるまをきせ。國御堂関白の養せむい
 つる白物の車の山前を。路は呪咀の土器を埋しを報すたせ
 此度上洛あはんまおほく。吉少うんんと練はれ鳥朝含笑そ泰
 山の言語故あるまあ。今院宣を辱し。父が年暮の勘當
 を許され。洛へよりめ。の小事ふかつらひく止る。や洛ふ赴
 首を白刃の下。喪も生涯不孝の子と。人ふハ勝まり。い
 人の常言も怪をそ。怪散らそ。ふくまはめ
 もひそやぐてゆり。野風を逐退よ。焦燥あ。郎よりけ
 棒をり。狼の首小鉢を敷。只一言。率退。又一人
 つ。いと高やふ。声腸を断。るる人。眉を頰け。あし
 上洛あはん。と。あじと。の多。白鯨もハ代。日
 雄。と。取。い。い。あ。も。白。を。と。岩。間。の
 水を堰。ぬ。の。持。袖。濡。さ。い。志。ハ。勵。せ。も。の。南
 海の。運。け。を。焦。し。る。路。へ。旅。する。人。の。ゆ。す。更。は。は。川
 朝呵。と。あ。は。か。も。一。夜。と。ふ。と。物。る。い。え
 福福ハ天。は。係。る。の。を。い。と。ま。も。え。め。の。あ。い。懲
 馬。よ。ち。騎。つ。轡。を。鳴。ら。て。あ。は。鳴。呼。悲。き。を。ち。の。行
 主。從。妹。夫。の。契。も。絶。ん。後。も。あ。い。合。れ。る。

春虎子 鹿月川 高橋 卷之三 一七

第八回

實莊嚴院は御曹司強弓を示せ
白河山中は八町磔別離を悲む

六條判官爲義朝臣ハ爲朝の放る鶴を召進まると爲一院鳥羽上皇
定ち下され一日数も既より入聖は迫りぬとていかに流業より有る毎の音
耗もあふされハ只願直愛剛も折しも忽地御曹司に召ら彼鶴を獲りて
上洛し六條堀川の館に到りしに斜あふとて流をびおほしやうて又子
の對面を許し多し汝が世度の忠勤ハ往の過を補ふは足なりと宣ハ
爲朝も恙ある尊顔を沐しよ流ごとくをすしをやもつらく見
まれば五年が極よといふより老々もさまりさるを久く遠ざりた
せざる不孝さよと悔うして漫ふ落涙しあひるかく判官と時を
うりん鶴を扛擔せし院の御所はすりすれを進ませし近曾近
衛院御極の一日少くおのせりしをりし一院ハ鶴を御読する
とよも敢由よといのまきもなり。さう義家居多の寃魂追福の爲
みして放るりのを朕が畜んもよする。これをハ放りせよと仰しやう
鶴を放るも人ハ捨れよとび茹をせし九骨は飛揚し。爲朝の苦辛忽地
徒らありたりこのち何も仰せらるるみりし極よ爲朝ハちこそ
流業之りんとおほせしが有る一日徳大寺中納言公能卿を上卿とて外記
仰し宣旨を下されしその文は
源爲朝久任宰府忽緒朝憲咸背論言梟惡頗聞
狼藉尤甚早可令禁進其身依宣旨執達如件
かのぞく仰下されし爲義くら敬馬さめい。彼が鎮西ありて武威
を逞しせし國司の強弱酷吏の非義を誡するまづのりあし朝家ハ

叛きそてりしあもあふま。此度の忠勤あんせん恩賞あんせきハやくも。かゝる御おんを蒙まかして
ら海うみをあはね。と名なさひひし。鳥朝とりあそハ騷さわさるまもま。まは信
西にしに知しる。豫よくぞい設しやうつるよとて。ふく引龍ひきりゆう居かひ罪つみをすら
あま主上の御おん慥しやう劇げきく在ある故ゆゑ也。うき何の制度せいどしまく。七月しちがつ廿六日
に至いたり。近衛院終つひ上明あきらと多おほひたり。聖算せいざん十七歳しちさいとす。上皇じやうわう鳥羽
女院にょいん美福みふくのあんま。更さらもあつた。もと只新院にんしんいん帝ていのなまを記
あひ。とろ方かたこそ位ゐ復かへつるも。一の宮重仁親王いのみやちかひのちかを位ゐ小即せ
あつた。といと頼たのり。おほくさへる。美福門院みふくかどいんのなまをひ
あ。後白河院ごしろくわいん難なんかこの時ときハ四の宮よのみやとてあふ。とて生なせしを。かて位
は即ついでちかひせもふ。これ全ぜんく近清院世きんしやういんよを早はやうせもあつた。ハ新院にんいんの呪咀
し。あつたと思おも食く法皇ほつわう鳥羽とりあそもも。さうまはえ。さう。ハとろあつた
あ。これより。新院にんいんの由恨よしごい。さう。さう。さう。ハ涼暗即
位ゐは今茲いまこゝろもられ。あつた。ハ久壽くす二年四月廿七日にんしやうにんごしちがつにじちふ保元たかもとと改かへえあり
り。是こゝろより先太宰府さきたさいふの鳥朝とりあそ久ひさく六條堀河の館たには押籠おしかごられ。
在ある。とけえ。は衆人しゆじん今いまさう。さう。敬けい馬まと。され。さう。めより。
みあひ。と多おほひつる。ハ罵ののしり周章しゆしやう大おほま。あ。これハ白縫しろぬいも。さう。
さあ。あひのゆか。か。さ。紀平治きへいぢの妻つま八代やちだいを宰府さいふの天神あまのかみと代かり
さ。今いまさう。ハ夫おとこは遇あせ。願ねがふ。さう。さう。紫下むらさき某生あるまじき再説さいせつ今茲いまこゝろ
七月端しちがつたんの二日ふたひ一院いっいん鳥羽法皇とりあそほつわう山明やまあきら御み多おほひぬ。去年こゝろの秋あき近清院きんしやういんと記し
せ。あ。このつり。あ。四月しがつの海うみより御違例おんちがひれいあり。とせ。
が聖せい一いち寺てらい。さ。六む十じゅうも満みちる。あ。いと惜おしる。と御おん齡ねいあり。と。と。と。
新院にんいんの海うみと。さ。さ。の在ある。この折まも。何なにと。さ。世よの中ちゆう恩劇おんげき

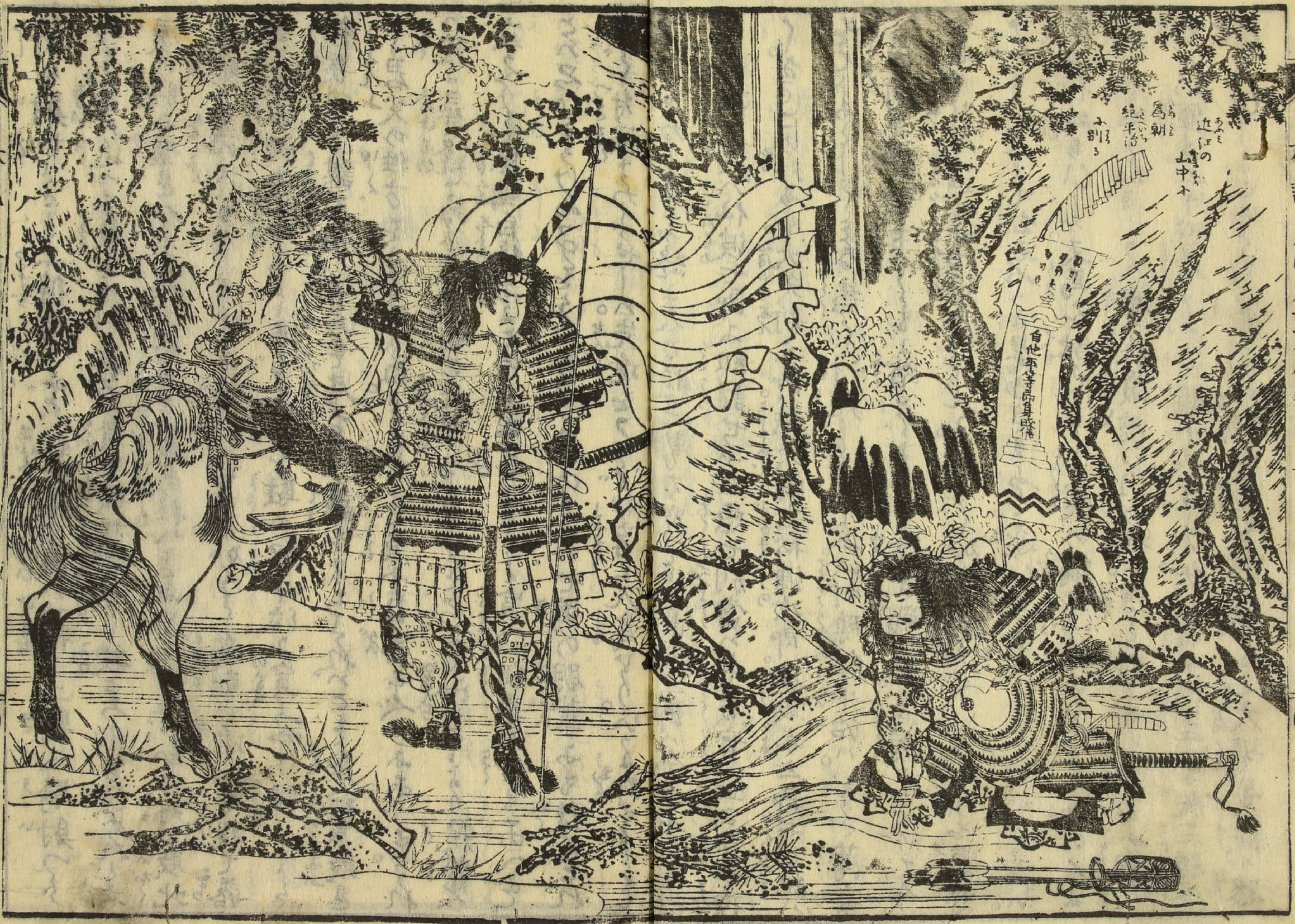
あ。これより。新院にんいんの由恨よしごい。さう。さう。さう。ハ涼暗即
位ゐは今茲いまこゝろもられ。あつた。ハ久壽くす二年四月廿七日にんしやうにんごしちがつにじちふ保元たかもとと改かへえあり
り。是こゝろより先太宰府さきたさいふの鳥朝とりあそ久ひさく六條堀河の館たには押籠おしかごられ。
在ある。とけえ。は衆人しゆじん今いまさう。さう。敬けい馬まと。され。さう。めより。
みあひ。と多おほひつる。ハ罵ののしり周章しゆしやう大おほま。あ。これハ白縫しろぬいも。さう。
さあ。あひのゆか。か。さ。紀平治きへいぢの妻つま八代やちだいを宰府さいふの天神あまのかみと代かり
さ。今いまさう。ハ夫おとこは遇あせ。願ねがふ。さう。さう。紫下むらさき某生あるまじき再説さいせつ今茲いまこゝろ
七月端しちがつたんの二日ふたひ一院いっいん鳥羽法皇とりあそほつわう山明やまあきら御み多おほひぬ。去年こゝろの秋あき近清院きんしやういんと記し
せ。あ。このつり。あ。四月しがつの海うみより御違例おんちがひれいあり。とせ。
が聖せい一いち寺てらい。さ。六む十じゅうも満みちる。あ。いと惜おしる。と御おん齡ねいあり。と。と。と。
新院にんいんの海うみと。さ。さ。の在ある。この折まも。何なにと。さ。世よの中ちゆう恩劇おんげき

東三條の留守より内裏より爲義の嫡男下野守義朝を仰せり。
 東三條の留守より少監物藤原光貞を召捕せり。拷問せり。
 新院の謀反を聞かす。新院もこの事を聞かす。
 今ハかゝる事あり。今ハかゝる事あり。今ハかゝる事あり。
 中も義朝ハ既ニ内裏へ召れり。彼ガ父の爲義ハ召せり。
 應せり。是ハ館ニあり。館ニあり。館ニあり。館ニあり。
 仰下されり。爲義ハ辭せり。得たり。得たり。得たり。得たり。
 大夫教長朝臣を六條堀河の館ニ遣はれり。叮嚀し召せり。
 爲義朝臣今ハ已し。爲義朝臣今ハ已し。爲義朝臣今ハ已し。
 六郎爲宗七郎爲成鎮西八郎爲朝源九郎爲仲。六郎爲宗七郎爲成鎮西八郎爲朝源九郎爲仲。
 美濃國モ柳井。美濃國モ柳井。美濃國モ柳井。美濃國モ柳井。
 候。能守季長。能守季長。能守季長。能守季長。
 直垂ハ龍と鏡。直垂ハ龍と鏡。直垂ハ龍と鏡。直垂ハ龍と鏡。
 口五寸の太刀。熊皮の尻鞘。熊皮の尻鞘。熊皮の尻鞘。熊皮の尻鞘。
 下六指の黒羽の矢。下六指の黒羽の矢。下六指の黒羽の矢。下六指の黒羽の矢。
 勢勇ハ樊噲也。勢勇ハ樊噲也。勢勇ハ樊噲也。勢勇ハ樊噲也。
 天晴勇ハ天將也。天晴勇ハ天將也。天晴勇ハ天將也。天晴勇ハ天將也。
 屋の山原を綻。屋の山原を綻。屋の山原を綻。屋の山原を綻。
 時よりハ才丈也。時よりハ才丈也。時よりハ才丈也。時よりハ才丈也。
 御感多クおかし。御感多クおかし。御感多クおかし。御感多クおかし。

と仰下まらん。為朝らひ有り。機小臨之。変に應に。敵を一時に拉ぶ。の謀を獻す。小聖運の傾く。右左府頼長公。これを拒く。用ひ。只徒小敵の寄。を待てる。程。十一日の曉。清盛義朝を大將とし。教千騎の官軍。押寄。既。詰の合戦。及べり。鎮西より召俱。九八騎の。等。前後左右。真先。馬。を。只一戦。清盛の大軍を。追。兄義朝の。星を射削。膽を冷。勝。新院方。官軍。乱。忽。火を放。新院。の門より出御。北白河を投。御方の軍兵。を。も。猛火。隔。煙。供。奉。この時。為朝の。終。高間。金子十郎。討。と。取。二八仙。波。組。討。悪。七。別。當。舟。實。盛。首。を。授。く。この。外。大。矢。新。之。郎。越。矢。源。太。松。浦。次。郎。取。之。郎。紀。八。を。一。箇。所。負。主。踏。防。戰。為。朝。今。ハ。君。父。遙。落。伸。ひ。つ。ん。り。か。あ。と。御。蹟。を。暮。ひ。す。わ。せん。て。あ。つ。る。落。さ。ま。を。逐。い。と。せん。と。敵。あ。げ。れ。ば。既。行。地。多。ひ。が。又。馬。を。馳。上。矢。の。鏑。只。一。條。の。を。せ。の。人。又。ち。や。と。ほ。一。人。寶。莊。嚴。院。の。門。の。柱。不。漂。と。射。さ。ま。抑。爲。朝。の。軍。ふ。二。十。四。差。る。矢。二。腰。十。八。差。る。矢。三。腰。十。六。差。る。矢。三。腰。と。負。い。し。この。ら。義。朝。の。兜。の。星。を。射。削。と。大。場。景。能。が。膝。

春説弓馬月前篇卷之三

七一



春見子長月前編卷之三

村言口見月前編卷之三

九

節を射切ると二條ありて六化矢まゝ或ハ一條二騎三騎射つゝ
 めも或ハ近づく敵を引寄せ首を損切撥擲し投さるゝもいぬれど大
 厦の將不壞とんとするによく一木の柱へさふあふれぬの射は敗北
 一終は落人となりもてせしむるにかゝる鳥朝の近江を投て落
 ろふ白河の山中ありて馬を駐め紀平治は宣ふや恨くく
 頼長公の謀を用ひもろも居る敵をすちられんことを忽地軍敗を
 君父の往方をしるもあはねとて直小自害とてさふあふれ
 へ父は尋逢すかたせし世の光景をもえんとて汝はより筑紫へ
 立ち入りて忠國白縫はこののを告よと宣ハ紀平治はあへど
 こゝのいもけぬのをうに多かりぬりのる九七騎の朋輩も後とこれ
 しく討添すかたせし先途をえとけならん鳥なり。いふ仰さるるも
 立ちまゝしとて鳥朝又宣ふや汝が誠忠はこれよくありぬとれも
 この軍敗とて鳥朝もゆくへみくじたりとせえさハ菊池原田が徒時
 をひく不意に押寄せヨヌ年の誓懐をそとさんとせてやあえさるを
 鎮西なる氏族外戚こののをあへん。さうの外は狼狽し忽地擒
 とありて生取を曝らさるもあへん。下小朽をうとてどく
 汝ハ彼処不走入りて忠國小力を殺せ脱るゝハ逃さりりまらざら
 り汝も討死せよ鳥朝が生前の公うとこれのことなり。と言を喝
 論し人の紀平治中やく兼引く。あふ仰は従ひなり宰府は走
 下りてやごす。合戦。りりまりぬ忠國白縫の仇俱く便宜れ
 地は潜せすかたを時をすらて再會を計りて。君も又よく艱苦を忍びて
 性命を保まらんこそねらう。とせし鳥朝莞余とてこれ。

春澄三長月三用三三

七三

懈ゆるるとき一。汝なんぢ女め。別これを惜をみ。落おち人の物具ものぐも同めをく於お山やま法師ほうしたる人
とま支さられそ人おの怪あまぬ間まふとくと仰おほまれが。紀平治きへい令しせんまくく舊ふる
の路みちへ立たえりの為ため朝あさの馬うまをまめめく。滋賀しがのう人ひと赴おもひまりて。

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

椿説弓張月前篇卷之三 畢

